

市原の古墳探訪に参加して

☆ 邪馬台国時代のいちはらに夢を馳せる

今年度のリレー塾のテーマは「房総の邪馬台国を追う」だ。その一環として「市原の古墳探訪」が計画された。参加者63名、それぞれ3世紀頃のいちはらの様子を頭に描きながら現地に向かった。63名の参加者、バス2台、担当の上野先生からは当日の日程及び神門古墳群の概要説明。

神門5・4・3号墳は出現期の古墳として注目されている。古墳群を取り巻く中台、南中台、長平台遺跡から畿内・北陸・東海・北関東等外来系土器が多く含まれ、神門古墳群との関わりを示唆している。

5号墳では、市原市埋文の大村所長の説明を聞き、直接古墳に上がることができた。未発達な前方部と後円部の高さの比、周溝の様子を実感した。副葬品として鉄剣・鉄鏃・ガラス玉が出ている。5号墳から消滅した4・、3号墳の方向を見ながら、邪馬台国時代のいちはらに思いを馳せた。

埋蔵文化センターでは、大村所長から、資料とスライドを用い、



大村所長を囲んで。

主として南中台遺跡を中心に当時の集落、土器特に外来系土器についての説明があった。特に印象に残ったのは堅穴S I 13は、大きく、北陸系土器がでセットで出ている。北陸から来た人の住まいでリーダー的存在であったという。同時代の中台遺跡にも同様なケースがあった。中台遺跡では、区画された独立棟持柱建物が検出され首長の祭祀場として、神門古墳群との関わりを示唆していた。収蔵庫見学もあった。天神台遺跡調査整理、国分寺瓦のまとめの段階と聞き、今後が楽しみである。



神門古墳群（5号墳）に分け入る参加者の皆さん

☆ 発掘調査を踏まえた復元の重要性

昼食後訪問の上総国分尼寺では、発掘調査に基づく復元模型の重要性を学んだ。中門、回廊、基壇、瓦、塗料等研究の成果を復元に生かしている。併せて華やかな天平文化にも思いを寄せた。



復元された上総国分尼寺中門の前で

☆ ヤマト王権との関わりを強めた姉崎の豪族

養老川を挟んで姉崎古墳群が存在する。神門古墳群の継続はなかったが、川向こうの上海上の豪族は、4世紀から7世紀にかけて前方後円墳、円墳、前方後方墳等数々の大型古墳を築いた。今回は、釈迦山、姉崎天神山、鶴窪古墳を探訪した。千葉県文化財センター、栗田先生の解説があった。同じ前方後円墳でも時期によって、墳型が微妙に異なる。

釈迦山古墳はヤブ蚊で閉口したが、木立の中に前方部、後円部の様子がわかった。管玉、鉄鏃、刀子S字状甕、高坏等が検出されている。



天神山古墳前方部で栗田氏の説明を受ける参加者

姉崎天神山古墳は、雑草が刈り取られ、墳型の様子がよくわかった。前方部が長く後円部より低いのは、前期古墳の特徴のようだ。更に前方部も後円部も平面である。儀式の場かも知れない。東京湾からはよく見える立地だ。

鶴窪古墳は時代が下がるようだ。埴輪があったらしい。古墳の上にあがってみて、ちょっと不思議な気がした。前方部が後方部より低いのである。何かの理由で削られたのではなかろうか。

古墳と国造との関わりを上野先生から聞いた。帰りのバスで、9月には邪馬台国時代の房総の古墳、木更津の高部30号、32号墳、そして出土品で素晴らしい金鈴塚古墳を探訪するとアナウンスがあった。

今からわくわくしている。

このような機会を作ってくださったスタッフの皆様に感謝申し上げます。



鶴窪古墳で